
近代輸出陶磁器の種別形成と変化について

上村友子(京都工芸繊維大学)

本発表は近代において西欧の高級陶磁器を模範とし、輸出を目的に製作された一部の日本陶磁器(以下、近代輸出陶磁器)の明治から大正にかけておこった種別形成を、政府役人の報告書を基に分析することを目的としている。

明治初期、近代輸出陶磁器は、当時の西欧の高級陶磁器の持つ伝統や権威も写し取るかのように、装飾的な美術品の製作という意識を伴って生産された。製陶事業の工業化につれ機械生産も行われたが、過産と供給過多の影響を受け徐々に衰退していった。その背景にはジャポニズムの衰退といった大きな潮流もあったが、外国人の需要に応えるために製作された技巧中心の近代輸出陶磁器を芸術的産物と呼ぶことに異論を唱えるものが少なくなかったことや、陶磁器の種別確立が後手に回り、日本の製陶業者が日常飲食器として輸出したものを海外需要者の間では室内装飾品として扱っているなど、製品の用途について意識の違いが起きていたことなども衰退の要因として考えられる。

近代輸出陶磁器は明治16年には農商務省より日常飲食器と室内装飾品の区別が促され、各国の駐在員らによって商況報告が行われるなど欧風文化と西洋人の好みを模索しながら制作されていた。

陶磁器の現地での用途を含む種別が反映され、なおかつ体系的な形で示されたのは大正14(1925)年の商工省貿易局チリ(サンディアゴ)駐在通信員である新谷吉松の「智利に於ける陶磁器商業に就て」である。新谷は市場にある陶磁器を装飾陶磁器、実用陶磁器、建築陶磁器の三種に大別し、さらにその中でも実用陶磁器を美術的食器類、実用的食器類、寝室用品類に区別して報告を行った。とりわけ装飾陶磁器とは区別した上で、美術的食器類において、機械工業による大量生産品を芸術的作品であると明言しているものは国内では本資料が最初と言えるだろう。

近年、美術史の中でも里帰り品を中心とした近代輸出陶磁器の再評価が活発に行われており、作陶家だけでなく産地などによっても研究が行われるようになってきている。一方で日本国外に輸出した後の陶磁器を取り巻く環境についての考察は十分になされているとは言い難い。

近代輸出陶磁器は用途を持ったことで、これまで形状を問わずただ奢侈的な意匠が載せられた器だったものが細分化され、意味を持つ陶磁器の種別が付加された。本発表では明治から大正にかけて製作、輸出された近代輸出陶磁器の種別形成とその変化について、政府役人の報告書を中心に分析することで、諸外国における近代輸出陶磁器の占める位置を明らかにする。このことにより、これまで手工的な技巧性が主として再評価されてきた近代輸出陶磁器について、その役割を含めた新しい見解を示すことができる。